

村の名称

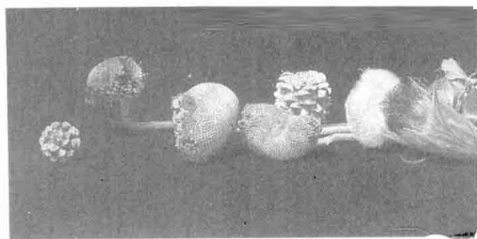
辻原 登



村の名前

辻原 登

文藝春秋



村の名前

一九九〇年八月二五日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著 者 辻 原 登

発 行 者 豊 田 健 次

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―三

印 刷 大日本印刷
製 本 加藤製本

© Noboru Tsujihara 1990

ISBN 4-16-312050-5 Printed in Japan

万一落し乱丁の場合はお取替えいたします

辻原登（つじはらのぼる）

一九四五年十二月、和歌山県日高郡印南町に生まれる。一九六四年、大阪学芸大学附属高校卒業、同年上京して文化学院に学ぶ。同人雑誌「第二次文学共和国」に参加。

一九八五年「大かけて」で作家デビュー、第94回芥川賞候補となる。一九九〇年「村の名前」で第108回芥川賞受賞。

村の
名前

犬か
けて

村の 名前

装 幀 野田弘志

デザイン 坂田政則

村の 名 前

天井から、扇風機のはっきりしない風が降りてくる。音ばかり大きくて回転がのろいから、三枚の鉄製の羽根のかたちがぼんやりとみえる。涼しくもなんともない。風を送る以外の目的で回っているとは思えない。

羽根の先に、一匹の銀蠅が平気でとまっていた。はじめは死んでいるのかと思ったが、さっき一度離れて窓のほうへ行き、闇に塗りつぶされた黒いガラスにへばりついて外を眺め回したあと、舞い戻ると、何の苦もなくもう一度羽根にとびつき、それっきりもう動かない。まわりは体温とほとんど同じ暑さだ。空気が体の輪郭をあやふやにした。橋は、動くのも、手や足がどこにあるか感じるのも億劫なほどだ。このままなめくじみたいに溶けだしてしまふかもしれない。

橋はベッドから体を起し、天井の釘から紐で吊した麻の蚊帳を引きおろした。彼の体はすっぱり濡のように包まれた。隣では同じように蚊帳を降ろした加藤さんが、うめくようないびきをかいて眠っている。扇風機を切り、枕許の電灯を消しても、まだどこかで何かが回っている気配が残って、橋は耳を澄ませ、あたりを見回した。ふたつのベッドのまっ暗なはずまで、渦巻の蚊取線香が、尖端だけをちよっと照らして浮かび上った。

一時間ほど前、加藤さんは、極楽、極楽、とつぶやくとさっさと眠り込んだが、橋は日なたの犬のように体をあちこち動かしてつづけたあげく、左脇下になって両膝を掻き寄せ、顔を窓のほうへむけると、やっと少し落ち着いた。

日程表どおりなら三日のはずが、ここに辿り着くのに五日もかかった。成田から香港を経由して、広州までは予定どおり一日半の行程だったが、長沙行きちやうさの飛行機が悪天候のために飛ばず、広州で二日間足留めをくらった。天気が回復したかと思うと、エンジンの故障でまたぐずぐずする。業を煮やして、ふたりは、屋前の武昌行きぶしやうの二四八次直快列車に飛び乗った。全体がくすんだ緑色の列車だ。一、四三五mm広軌レールを、東風4形ディーゼル機関車が牽引する。

最後尾の一等寝台に乗りこんだ。花県、源潭、英徳と来て真昼を過ぎると、外気が体温よりよほど高いことが分った。身動きするたびに、皮膚が挟まれるように痛い。

英徳駅のプラットホームで、西瓜売りに出くわした。それから、停車する駅ごとに窓に西瓜売りが現われ、それがいつも上半身裸の瘦せこけた男で、どこまで行っても幻のように変らない。筋肉質の、銅色の胸板に汗が光っている。男はこの列車に乗り込んでいて、停車駅ごとに飛び降り、プラットホームをはしからはしへ西瓜を売って歩く、そうとしか思えない。なぜ列車の中で売らないのだろう。男の持籠もっこんの中の西瓜が駅ごとに変わってゆくのもあやしい。最初の英徳駅のラグビーボール状の長いものから、北上するにつれ、だんだんまるいものに形が違ってゆくのだ。表皮の黒いギザギザ模様も鋭く折れ、くつきりとしてくる。橘と加藤さんは、そいつを二度買って食べた。真昼の英徳駅のいちばん長いものと、長沙に近い深夜の株洲なぐさう駅の完全にまるくなったふたつ。長いほど祖型に近いというふうなことをいつか小耳に挟んだことがあったから、十七時間の鉄道の旅の間に、ひととおり西瓜の歴史も辿ったことになる。西瓜の始まりと終りだ。そのとびきり長い時間の感覚が、眠れない橋をすこし慰めた。まるいほうにうんと甘味がのっていた。広東カントは湿気がありすぎてだめなんだ、と加藤さんがきめつけた。

午後四時ごろ、列車が深い川峽せんきょうにさしかかると、空のどこにも雲はないのに、大粒のはげしい雨が落ちてきた。真っ茶色な川面に、それは光りながら熊手のように突き刺さる。鉄橋を渡り切ったとたん、びたりと止んだ。始めと終りが、舌の上のソーダみたいに際立った。

斜面の小さな日干し煉瓦の町の空気は、通り雨を浴びて甘味を含んでいた。

夜になっても暑さはゆるまない。橋と加藤さんは向い合って窓に凭れ、外の闇にばかり視線を投げていた。

「危いねえ」

と加藤さんが、いきなり不眠特有のしゃがれ声をあげた。

「さっきからみると、どの車も暗闇をライトもつけずに走っている」

「あれは、対向のときだけ両方で点滅させるんです。この国ではどこへ行ってもそうですよ」

と橋は説明した。

「大きな蛍みためにピカピカさせながらすれ違う。ふしぎだねえ」

「あれで、バッテリーを節約してるんです」

「ついたり消したりのほうが減るんじゃないかねえ」

「そうです。減りますよ。でも、彼らはそうなんですよ」

それきりふたりは押し黙った。

加藤さんが胸に頸をうずめてうとうとしかけたな、と橋が思つて外に顔を向けると、いきなり熱風が吹きつけ、すぐそばをまっかに燃えている炉が横切った。炉の周囲に、何人もの

上半身裸の人影が、長い火掻き棒を持って動いている。同じ光景がいくつも続く。よほど大きな工場だ。こいつはどこかでみたぞ、という思いがきまるとて離れない。熱い火のまわりに、裸の大人たちが火掻き棒を持って……、たつたいまみたものの記憶にすぎないのだらうか。それとも物心もつかない頃の……、あるいは成田から香港までの飛行機のまどろみの中……、といきなりそれが途切れると、列車は数秒間、トンネルに入りでもしたような暗闇を走り、ポイントを一とつ越えた。橋は腕時計をみた。もう長沙に入っているところだ。

列車は立て続けに右にふたつ、左に三つ、ポイントをジグザグに越えて揺れた。赤、橙、青の信号灯がずいぶん高い位置にみえた。蒸気の濃いにおいが鼻をついた。無数のレールがうねり、くねっている。島式プラットホームの先端が浮かんた。やがて、白地に黒の、長沙の駅名表示板が流れた。橋は、加藤さんの膝を激しくゆすった。

暗灰色の大気の中で、連結器がぶつかりあう音や、機関車の蒸気を逃がす音が響いた。高く舞い上った蒸気の煙に巻かれた跨線橋には、貿易公団の李さん、同じ課の女の李さん、人保保険公団の朱さんたちが待っていた。なまじ髭の若い尹さんの運転で出発する。

湖南省の、湘江や沅江沿いの水田地帯に茂る蘭草で畳表を織らせ、買い付けるのが今回の旅の目的だ。この話は加藤さんから持ちこまれた。加藤さんは公社、公団の社宅用の畳を一手に納品している広尾の畳卸しだ。岡山や高知や熊本などの蘭草の生産量はこの十年で三分

の one になってしまった。農民が、手間のかかる割に儲けの少ない蘭草を作らなくなった。離農者も増えている。台湾や韓国からも輸入しているが、年々高くなっている。そこで、加藤さんは中国に目をつけた。橘のところは中堅どころの、手堅い商売で定評のある商社で、今回も、いっさいのリスクは加藤さん持ちということを手伝うことになった。数パーセントの仲介手数料だけいただく。料率はまだ決めてない。

貿易公団の李さんとは、手紙とテレックスで打ち合せをして乗り込んできたが、実際どんな展開になるのか、李さんという男は信頼できるのか、湖南省の蘭草が畳表用として使われるのか、そもそも湖南省にはほんとうに蘭草はあるのか、色々不安の種があった。そのうえ、畳表を織る工場について、李さんの連絡は最後まであいまいなままで、橘にはそれが故意の言い落しにすら思えた。といっても、こんなことは中国との取引きでは特に珍しいことではなく、目くじら立てるほどでもない。とにかく日本人を呼んでおいて、それからあちこち引っぱり回すうちに話を詰めてゆくというやりかただ。しかし、もうひとつ心に引っかかることがあった。出がけに、いとこの亨が、大垣で車に轢かれて死んだ。橘は、岐阜の大垣に母親をひとり残していた。その母親を、亨が見舞ってくれての帰り、飴の辻の交差点で、信号無視のトラックにはねとばされたのだ。社内規定では、海外出張の変更や緊急帰国は、三親等までの死亡、または重態しか認められていない。橘はスーツケースに旅行道具を

詰める手を休め、立ち上って広辞林で親等を確かめた。いとは四親等だった。帰れない、と告げると、あんなにかシナから一生もどらんでよろしい、もう二度と巢南^{すなみ}の土地を踏ませない、と電話口で母親の罵り声が響いた。

「ああ、また白髪がふえる！」

鎖を引きずった犬のような、うつつうしい旅立ちになってしまった。

トヨタのヴァンは明けきらない長沙市内でもたつき、二度も迷路のような小路に入って、そこでさらにふたりの男を乗せた。彼らについては紹介も何もない。座席は向い合せに改造しており、左窓際に加藤さんと橘が対面して坐り、加藤さんの隣が女の李さん、橘の隣が男の李さん、助手席に朱さん、うしろの橘たちのスーツケースのはざまに、途中で乗り込んだひよろ長い男とまるっこい小柄な男、という配置だ。このふたりはくつついて離れず、ひっそりなしかん高い声でしゃべり、くすくす笑いあつてばかりいる。橘は、列車で食べたふたつの西瓜を思い出した。

目的地への到着は午後四時ごろの予定だ、と李さんが告げた。橘は李さんの白っぽい顔をつめ、歳は四十五ぐらい、北京から流れてきたな、と踏んだ。そして、いったいあなたは我々をどこへ連れてゆくつもりなのか、と問いかけた。大変いいところなのだ、きつとあなたがたを満足させると信じている、と李さんはやりとした。しゃべると、たばこの脂^{たば}の臭

いが口辺から出て広がる。なんというところなのかと追うと、それは着けば分る、言わぬが花と言う、とかわされた。

「李さん、何いつてるの？」

加藤さんが向いからせつついた。

「行き先をもったいつけて、教えないんですよ。言わぬが花なんていつて……」

「それゃきつと花のあるところなんだ。いいよ。こちとらはどこだって行く気で来たんだから、連中に任せようや。取って食おうってんじゃないだろう」

しかし、橘はすっかり用心深くなつて、我々は観光で来たのではない、与李さんに釘を刺した。当然だ、与李さんは首を振って同意する。そこには良い管理の花^か庭工場があるから心配するな。話についているのか。おお、当然、当然、とさらに首を大きく振る。我々貿易公団は大変力があるのだ。問題は全くない。安心して、外の景色をみてはどうか、与李さんはたばこを挟んだ指を窓にのばした。車はちようど高い、大きな橋を渡るところだった。

湘江だ、与李さんがいった。湘江よ、と女の李さんがちよつとハスキーな溜り声で繰り返す。

「いま渡る川が湘江だそうですよ」

橘は、加藤さんに向つて日本語で繰り返した。赤褐色に濁った、重たそうな流れが大きく、